

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）の言葉を掲載いたします。

わが子がよくない遊びにふけり、親の忠言には耳をかそうとしない。そればかりか、何かあると反抗し、たてついてくる。

夫婦の気持ちが一致しない。性格もあわない。離婚したいけれども、子どものことを思えばそれもできず、ずるずるべったりであじけない生活を送っている。

……まだまだいくらでもあるが、こうしたことについて、まったく興味のない人々もいると思う。

そうした人々は、たぶん幸福なのである。たんなる政治や科学技術や、学問やイデオロギーなどでは、なかなか解決できない問題が、世の中にはものすごく多いのだ。いわゆる幸福な人びとの中には、こうした苦難について軽視するむきがあるかもしれない。人にはそれぞれの立場があるので、批評のかぎりではないともいえるが、しかし一般大衆の中に横たわっているこれらの問題に、あるいは同情の涙をながし、あるいは激励援助の手をさしのべるといふことは、同じ人間においてはきわめて意義のあることではあるまいか。

苦難は生活の不自然さ、心のゆがみの映った危険信号である。その原因を取りのぞくと豁然として幸福の天地が開けるのである。苦難の黒幕が開かれたとき、そこには明るい幸福の舞台が現われる。



人の苦難を見すごすな

丸山竹秋

要するに、自分にふりかかった困った問題には喜んであたる、という生き方である。そうすることによって、その苦難も立派に解決に向かうだけでなく、実践を通してその本人自身がより以上に立派な人になることができる。

このことは、人間生活にとって非常に意義が高い。そして苦しんでいる人たちが多いという現実を思えば思うほど、ますます重大になってくる。

他人のことを干渉しないというのも一理ある。しかしほんとうに困ったり弱ったりしている人たちを、見て見ぬふりをしてい、それで愛情があるといえるだろうか。

少なくとも人間である以上は、苦難にあえいでいる人を知ったならば、こうすればよいという生き方を積極的にすすめるのがほんとうの親切というものはあるまいか。困っている人を「あなたのせいだ」などといって冷笑するのでなく、責めるのではなく、その人のことを真剣に思い、心から同情しておすすめるのである。もしこれができないなら、そういう人こそ冷淡である。

自分ひとりでよいことをしまっておくようではほんとうの実践力はつかない。人々に知らせ、人々から励まされ、愛情をかけられたりして自分も立派になっていけるのだ。人生についての信念は社会のため、人のために尽くすことによって得られる。正しい考え、消極的な生き方ではだめである。

『つねに活路あり』より